

十六・十七世紀の備前焼茶道具の研究

Bizen ware Tea Utensils in 16th-17th centuries

下村 奈穂子
SHIMOMURA Nahoko

1. はじめに

本研究は、伝世資料、文献資料、出土資料を組み合わせて、16・17世紀の備前焼茶道具の編年をおこない、それによって茶の湯における備前焼の位置付けや、窯自体の有り方について解明することを目的とする。

岡山県備前市伊部周辺で生産されている備前焼は、古代からある須恵器の焼成方法を受け継いで生産された「焼き締め陶器」である。釉薬が施されていないため、器表は粗く、また色彩は基本的に茶褐色である。極めて素朴なやきものと言えよう。

12世紀末期の開窯以降、幕末に至るまで備前焼の主力製品は壺、甕、播鉢などの日常雑器であった。ところが、16世紀初期、美的価値が求められる「侘び茶」の道具として取り上げられるようになる。当時の茶の湯では、主に「唐物」と称される中国で生産されたものが高く賞玩されていた。唐物の茶道具は艶やかな釉薬が施された陶磁器や、端正な姿をした金属製のものが大部分を占める。そして、概して国内産の陶磁器は、そのような高価な唐物の代替品という目的で生産・使用されることが多い。一方、無釉で素朴な備前焼は、唐物とは大きな隔たりがあったはずである。それにもかかわらず、備前焼は「侘び茶」の道具として国内産陶磁器のうち最も早くから取り上げられ、現在に至るまでその評価や格は極めて高い。備前焼が茶道具として取り上げられ、評価された背景には、唐物や他の国内産陶磁器とは異なる役割や魅力があったに違いない。それゆえに、備前焼茶道具を研究することによって、「侘び茶」における美的感覚の一端を明らかにすることができるに違いないと考えた。

さらに備前窯では、侘び茶の黎明期である16世紀から、茶道具全体の生産が下火になる17世紀末期まで、水指や建水、茶入、花入、茶碗、鉢、香合など様々な器種の茶道具が生産されていた。備前窯ほど、

あらゆる器種を最初期から生産し、評価が高かった窯は存在しない。従って、これらを研究することによって、備前焼のみの展開が明らかにされるばかりではなく、それを指標として国内の他窯の製品に適用することも期待できるのである。

2. 研究の概要

本稿の研究範囲は、侘び茶において備前焼の使用が初めて確認できる16世紀初期から、茶道具生産が停滞期に入った17世紀末期までを対象とした。この約200年間を茶の湯の指導者の活躍時期、及びその影響期間に基づき、暫定的に、

I期：16世紀中期～後期

千利休(1522～92) 活躍および影響期

II期：16世紀末期～17世紀前期

古田織部(1544～1615) 活躍および影響期

III期：17世紀中期～後期

小堀遠州(1579～1647) 活躍および影響期

に区分した。

また、器種は、16～17世紀の茶会記に安定的に使用が認められ、名物として名物記に掲載された、

水指：釜や茶碗に注ぐ新しい水を蓄える容器

茶入：粉末状の茶を入れる小形の容器

花入：花を入れて飾る容器

建水：茶碗をゆすいだ後の汚れた水や湯を捨てる容器

の4種を取り上げることとした。

本稿の核となる編年作業では、まず伝世品、茶会記、出土資料から備前焼茶道具の基礎情報を収集した。これらから得られた情報を基に、器種ごとに上記のI～III期の時代に分け、以下の手順によって全体像の構築を試みた。

(1)伝世品の年代観を確認する

(2)茶会記の記述を分類し、器形を明らかにする

(3)茶会記の記述と伝世品を照合する

- (4)出土資料を分類し、器形を明らかにする
- (5)出土資料と伝世品を照合する
- (6)出土資料と茶会記の記述を照合する
- (7)以上の作業によって得られた結果を統合させる

3. 先行研究史

近代の備前焼研究の先駆者として挙げられるのが桂又三郎氏である。氏は、昭和 11～14 年に自ら発行した雑誌『備前焼』^{註1}を礎として、備前焼についての多くの著作を残した。

一方、近年、研究が大きく進展したのは考古学の分野である。特に、中世の壺・甕・播鉢については、間壁忠彦氏^{註2}などによって、多くのことが解明された。また、消費地遺跡の発掘調査が活発に行われ、広島県草戸千軒町遺跡や根来寺跡、大友府内町遺跡、堺環濠都市遺跡、江戸遺跡などで備前焼が大量に出土したことが報告された。

茶道具に関しては、林屋晴三氏の論稿^{註3}が初めてのまとまった考察と言えるものである。林屋氏は、焼成技法の違いによって、備前焼の茶道具を茶褐色の焼膚をなした「窯変手」、紫褐色に焼き上がった土膚の上に胡麻釉がなめらかにかかった「伊部手」、赤い襷をかけ回したかのような「緋襷」の3種に分類した。そして、伝武野紹鷗(1502～55)旧蔵の水指 銘「青海」や、伝北向道陳(1502～62)旧蔵の花入 銘「北向き」、弘治3年(1557)の紀年銘がある花入など、伝来の伴う資料や紀年銘資料を基軸にし、編年を組んだ。

3. 備前焼茶道具の誕生

12 世紀末期から生産が始まった備前焼は、『教言卿記』^{註4}や『桂川地蔵記』^{註5}などの文献資料、および出土状況^{註6}から、15 世紀以降、壺・甕・播鉢などが本格的に京都へ流入したことが明らかにできる。このなかには茶道具の一種である茶壺として使用されるものも含まれていた。

そして、15 世紀末期から 16 世紀初頭にかけて、新しく「侘び茶」が誕生した結果、天文年間(1532-55)には早くも備前焼が茶道具として使用されていたことが、『禅鳳雑談』^{註7}および「珠光古市播磨法師宛一紙」^{註8}から判明する。これらの資料から、当時、使用されていた備前焼は、水指および建水であると推測され、いずれも定番であった別の道具の比較材料として評価されて、その価値や美が見出されていた

と考えられた。

以降は、器種ごとに「2. 研究の概要」で記した手順で編年作業を行う。本稿では、その作業によって得られた結果のみを記す。

4. 水指

備前焼水指は、国内産陶磁器のうち、信楽焼に次いで早くから使用が確認され、茶会記における登場回数も信楽焼の次に多



図 1 備前焼水指 銘「青海」
徳川美術館蔵

い。備前焼は、信楽焼

と共に 16 世紀を代表する国内産陶磁器の水指であったと考えられる。そのため、I 期の水指には、信楽焼の鬼桶水指と同形の一重口桶形であった可能性が高い。さらに、天正期(1573-93)以降の備前窯では、南蛮物の写しなど、茶の湯のための特別な水指(図 1^{註9})を生産し、新たな展開を遂げたことが指摘できる。

II 期には、矢筈口筒形や変形一重口筒形、重ね餅形の水指が生産された。これらにみられる胴部の歪みや篋目などの装飾は、茶の湯の新しい趣向によるものと考えられる。

III 期になると、前段階から一転し、伊部手の技法によって作られた均整のとれた姿の水指があらわれた。「伊部手」とは、鉄分の多い土を用い、その鉄分が焼成によって溶けて、器表が黒や茶褐色の光沢を呈するものである。器表は、通常の焼き締めの場合、胎土に含まれる砂目によってやや粗い肌触りになるが、伊部手の場合は溶けた鉄分によって滑らかになるという違いがある。伊部手の水指には、極めて多彩な形状があり、この時期の水指は自由な造形感覚で作られるようになったと考えられる。

5. 茶入

備前焼茶入は、国内産陶磁器のうちでは、瀬戸茶

入に次いで早くから使用が確認される。唐物の使用が一般的であった茶入において、焼き締めである備前焼を使用することは特異な例であったと思われる。最初期の備前焼茶入については詳細を明らかにすることができないが、Ⅰ期後半にあたる天正期(1573-92)には唐物の肩衝形を模倣した茶入が生産されたと考えられる。この唐物写しの肩衝形は、Ⅱ期にあたる16世紀末期には、肩部が真っ直ぐ横に衝き、胴部がゆったりと膨らんだタイプの肩衝形を手本とするようになる。

またⅡ期には、新たに、唐物にはみられない和物独自の形状である筒形肩衝形もあらわれた。筒形肩衝形には、胴部に歪みや篋目の装飾が施されたものもあり、新しい茶の湯の趣向が加えられている。



図2 備前焼丸壺茶入 銘「関寺」
畠山記念館蔵

肩衝以外の形の茶入が初めてあらわれるのは、Ⅲ期である。それらは、丸壺形(図2^{註10})などの唐物茶入を忠実に模倣した形と、口狭形などこれまでにはない新規の形の二つのグループに分けられる。いずれも伊部手で、茶入に必要な鑑賞ポイントが具えられた均整のとれた姿の茶入である。



図3 備前焼筒形花入
根津美術館蔵

肩衝以外の形の茶入が初めてあらわれるのは、Ⅲ期である。それらは、丸壺形(図2^{註10})などの唐物茶入を忠実に模倣した形と、口狭形などこれまでにはない新規

6. 花入

備前焼花入は、国内産陶磁器のうちでは、最も早くから茶の湯で使用され、茶会記における登場回数も最多であることから、人気があったことがわかる。唐物の胡銅や青磁の使用が常で

あった茶の湯の花入にとって、焼き締めである備前焼は特異な位置を占めていたと思われる。Ⅰ期の備前焼花入は、主に掛け花入として使用された筒形と角形、唐物の置き花入を模倣した瓶形の三種があった。なかには、名物として取り上げられるものもあり、高く評価されていた。

Ⅱ期には、筒形(図3^{註11})と瓶形の両者共に、歪みや篋目など唐物にはみられない様々な装飾が施されるようになる。これは、慶長期(1596-1615)の茶の湯の趣向から誕生した和物独自の大胆な装飾の花入であると言える。

Ⅲ期は、伊部手の技法を駆使し、唐物を忠実に模倣して、均整のとれた姿の花入を生産したと考えられる。

7. 建水

備前焼建水は国内産陶磁器の内では、最も早くから茶の湯で使用され、茶会記における登場回数も圧倒的に多い。特に、永禄9年(1566)から天正13年(1585)までの20年間は、茶会記に登場する全ての建水のうち、備前焼が最も頻繁に用いられていたことから、当時流行の建水であったと考えられる。Ⅰ期の備前焼建水には、棒の先形、甕の蓋形、面桶形、合子形の四種の典型的器形があった。なかには、名物として取り上げられるものもあり、高く評価されていた。ところが、天正14年(1586)以降は、面桶建水にとってかわられ、備前焼建水の流行は去ってしまった。

但し、Ⅱ期にあたる17世紀前期には京都の下白山町遺跡出土資料のように歪みや篋目の装飾が施された建水が生産され、またⅢ期にあたる17世紀中期以降には伊部手による均整のとれた姿の建水も生産された。生産・使用は減少したが、時代ごとに流行の造形の建水が作られ続けていたのである。

8. 備前焼茶道具の評価史

備前焼茶道具が名物に加えられるのは、天正14年(1586)頃の道具の状況を記した『山上宗二記』^{註12}においてである。『山上宗二記』(不審庵本)では、建水が3点、花入が2点の合計5点の備前焼が名物として掲載され、16世紀はこの2器種の評価が高かったことが判明する。また、同様のことは、天正15年(1587)10月1日に豊臣秀吉が京都の北野天満宮で催した大茶会の記録である「北野大茶湯記」^{註13}からも確認できた。

17世紀中期の名物の状況をあらわしたのが『玩貨名物記』^{註14}である。『玩貨名物記』では、2点の備前焼水指が名物として取り上げられている。建水や花入に比べて出遅れていたようにも思える水指であったが、17世紀に至って初めて名物の仲間入りを果たしていたことになる。

備前焼の茶道具のうち名物として取り上げられる器種は、桃山時代は建水と花入であったが、江戸時代に至ると水指へと移行していたことが明らかになった。

9. 結論

最後に、時代別に備前焼茶道具全般を考察した結果、備前焼茶道具は時代ごとに、全ての器種が、同じように造形を変化させていることが明確になった。Ⅰ期(16世紀中期～後期)には唐物写し、Ⅱ期(16世紀末期～17世紀前期)には篋目や歪みが施された和物独自の新たな造形、Ⅲ期(17世紀中期～後期)は伊部手によって唐物写しと新規の器形の2タイプ、というように展開していたのである。

このⅠ～Ⅲ期は、本稿の最初に16世紀初期から17世紀末期の約200年間を茶の湯の指導者の活動時期およびその影響期間に基づき、暫定的に区分したものであったが、備前焼茶道具の編年結果にも対応していたことが明らかになった。さらに一部は、同時代の他窯の造形とも一致していた。従って、このような造形上の変化は、備前窯における生産体制の変化ではなく、茶の湯の指導者による趣向の移り変わりに起因したものと言える。備前窯は、それぞれの時代の流行に合わせて、ほぼ全ての器種を継続して生産していたことから、需要の変化に柔軟に対応し、新しい趣向に果敢に挑戦する革新的な産地であったと言える。

また、備前窯ではこの約200年間、基本的には須恵器から続く「焼き締め」の技術を変えることはなかった。従って、革新性と共に、伝統性を持ち合わせた類まれな窯とみなすことができる。

文献資料からは、備前焼茶道具の評価を判断するさいには、常に唐物や金属器などの定番道具と対比することによって、その価値が認められていたことが判明した。備前焼には唐物や金属器と比較しても、対抗できる“強さ”や“魅力”が認められていたと考えられる。茶の湯の趣向の移り変わりに柔軟に対応し、造形を変化させながらも、そのような“強さ”や“魅力”は変わらず保持し続けることができたの

である。それゆえに、侘び茶道具のなかでも、高い評価や格を獲得し続けたと考えられる。備前焼は決して唐物の代替品ではなく、それ自体が評価された茶道具であったと位置付けることができる。

注 参考文献

- 1) 桂又三郎：備前焼第一巻一四ノ六、文献書房、1936～1939
- 2) 間壁忠彦・間壁霞子：備前焼研究ノート(1)-(4)、倉敷考古館研究集報(1)(2)(5)(18)、倉敷考古館、1966、1968、1984
- 3) 林屋晴三：備前、世界陶磁全集4、小学館、pp135-169、1977
- 4) 教言卿記 第一、続群書類従完成会、pp149,162、1970
- 5) 高橋忠彦・高橋久子・古辞書研究会編：尊経閣文庫本 桂川地蔵記 影印・訳注・索引、八木書店、p286、2012
- 6) 中井淳史：京の備前焼—中世山城国における流通状況、備前歴史フォーラム資料集 備前焼研究最前線Ⅱ～備前焼、その歴史、今まで何がわかって、何がわからないのか～、備前市歴史民俗資料館紀要7、備前市歴史民俗資料館、備前市教育委員会生涯学習課、p88、2005
- 7) 北川忠彦校注 禪鳳雑談、日本思想大系23、岩波書店、pp489,494、1973
- 8) 熊倉功夫：現代語で読む茶の湯の古典(5)村田珠光と『心の文』、茶道雑誌70、河原書店、pp52-55、2006
- 9) 徳川将軍の御成り、徳川美術館、2012より転載
- 10) 日本の陶磁6、中央公論社、1974より転載
- 11) 根津美術館蔵品選 茶の湯美術編、根津美術館、2001より転載
- 12) 熊倉功夫校注：山上宗二記、岩波文庫、pp40,87-88、2006
- 13) 竹内順一、矢野環、田中秀隆、中村修也：秀吉の智略「北野大茶湯」大検証、淡交社、pp34-37、2009
- 14) 名物茶器—玩貨名物記と柳宮御物—、徳川美術館、根津美術館編、p208、1988